

の方々にお話をうかがうなど、秋の本番に向けて様々な準備作業を行なっています。三月の「日中戦争の戦跡訪問」の実績を踏まえた上で、今後の平和のためにさらに何かを積み上げることが目指し、努力していきたいと考えます。

私どもPPMへのご意見、または活動に興味がある方は、左記まで御連絡ください。

(二〇〇一年九月)
文責 山岸健太郎

E-mail: ppm_ppm21@hotmail.com

『青春の中国——甦る東亜同文書院生の夢』を追って

海老名敏宏

中国に置き去りにした青春

「昨年、私はこの黄浦江に書院同窓生三人の遺骨を散骨したんですよ」

書院四〇期の坂下雅章さんは私に語りかけてきた。ここは上海の外灘を一望する浦東地区の一角、明珠公園。高層ビルが次々と建設され、二二世紀の中国を象徴する

上海の新名所でもある。

私はとうとう東亜同文書院に関わる人たちと旅する機会を得た。

あの日本と中国がもつとも暗い関係にあった時代、中国に学び、中国と日本の未来を夢見た青春があったことを確かめたいと、私は東亜同文書院をテーマにテレビ番組の企画を数年にわたって出し続け、ようやく実ったのである。

「書院生はなぜそれほど中国にこだわるんでしょうか」。私は、書院に学んだ人々が、その後の人生でも深く中国と関わり続け、今も書院生であったことに強い誇りを抱き続ける姿に憧れさえ感じていた。

「やっぱり中国が好きだったんでしょ。青春を過ごしたこの上海が忘れられないんですよ」。坂下さんは遠く黄浦江の流れに目を遣りながらしみじみと応えてくれた。

坂下さんは当時、東亜同文書院出身として、その語学力を見込まれ、否応なく軍部に加担させられた。そして、旧満州で終戦を迎えた彼を待ち受けていたのは、捕虜という運命だった。厳しいシベリアでの六年におよぶつらい抑留生活に加え、中国でも五年の捕虜生活を体験することになる。書院出身であったため、スパイの疑いもかけられていたのかもしれない。

中国を愛した青年が、中国を傷付けた戦犯として裁かれる日を覚悟した。

「中国で捕虜になりながら、中国を嫌いになることはなかったんですか」

なおも私はつらい質問をむけた。

「日本はそれだけのことを中国に対してしたんです」

彼は私の質問の意図を見抜くように答えた。

「ソ連での抑留生活に比べたら、中国での生活は天国でした。中国人のやさしさを私は思い知らされたんです」

東亜同文書院の建学の理念に基づけば、書院生は日中友好提携の礎となるべく学び、当時、中国の覇権をめぐって欧米列強各国がしのぎを削っていた中で、中国と日本が手を携え、中国を富強ならしめることでアジアの理想を実現させよう、という思いを純粹に抱い

ていたのだろう。その思いで、今も中国を愛し、中国の大地を旅していった。

日中関係悪化の中で、書院生が中国のフィールドワークを目的にした「大旅行」で綴った日記が残っている。中国の農村部にいたるまで、当時の日本軍の進出に蹂躪される中国人民の苦悩と悲惨さを彼らは目のあたりにする。「何のための中国進出か、だれのための戦争か」

彼らは理想と現実のはざまでもうろたえていた。

彼らの思い描いた理想は幻想で終わった。それどころか、彼らの学んだ書院は戦争に加担した大学としての烙印を押され、戦後消滅させられていくのである。

日中友好の理想に燃えた青春は無残に打ち砕かれ、記憶の中から消されていく。彼らは人生でもっとも美しい青春を中国の大地に置き去りにしてしまったことに

なるのだろう。「何のための青春、何のための学問だったのか」

書院生は青春時代を、単なるノスタルジーで語るのではなく、悔しさをこめて語っていたことに私は気づいた。

「私は、自分が書院出身であることに誇りを持っています。でもその誇りは私自身の胸にしまっておくべきです。中国人にとって、書院は日中戦争時代の遺物であるし、本当のところ、書院に対してころころよく思っていない中国人の人々がいることも事実です」

そう語ってくれたのは書院四四期の幅館卓哉さんである。日中合併の企業に勤め、定年後も中国に進出した日本企業で働くなど、人一倍中国に対する思いが強いと感じた。

彼らは、その青春を中国の大地に置き去りにしたまま、今もその思いを引きずっている。それどころか、その後の彼らの人生は置き

去りにした青春の空洞を埋めようとするかのように中国に対するこだわりを増幅させてきたのではないだろうか。今も流暢に操る中国語。「けして中国を忘れてはいないぞ」という証に他ならない。だからこそ、若い大学生たちが中国に留学し、中国に学んでいる姿に人一倍喜びを感じ、自分の青春を重ねているように思う。

時代を越えてつながる青春

今回の番組は、東亜同文書院の関係者によって戦後、愛知県豊橋市に設立された愛知大学の学生たち（現代中国学部）の現地プログラム（留学生を送る南開大学・中国天津）を、かつての書院生が訪問し、さらに、自分の青春時代を確かめるために、上海に今も残る東亜同文書院時代のキャンパス（現・上海交通大学）を表敬訪問することがきっかけになった。

愛知大学は東亜同文書院の關係

者によって設立されたといえながら、書院の復活を認めなかった当時のGHQにより、書院とはまったく関係のない大学としてスタートせざるをえなかった。しかし、書院卒業をはたせなかった学生の多くを愛知大学が受け入れたことでも、書院生は愛知大学の学生たちを後輩として見守ってきた。

日本と中国が国交を復活させたのは、戦後三十年経った一九七五年である。中国を学びながら中国と関わることはできなかった書院生が、今平和な時代の中で、若い学生たちが中国人学生とともに学んでいる姿に自分の青春を重ねていくのは当然の思いであろう。天津の南開大学で中国語と格闘する現役大学生に、書院生たちは身を乗り出してアドバイスする。自分の青春時代を語り、若者たちにメールを送る姿には、書院生たちが中国に置き去りにした思いははっきりと見ることができた。

さらに、北京で行なわれた日中学生シンポジウムでは、日本の大学生がフィールドワークを実施し、中国の大学生を前に発表、意見を交換するという、書院時代の伝統も復活させた。調査したものを中国に返すという発想は、書院時代の方法をさらに発展させたやり方である。

この事業を推進した当時の加々美光行現代中国学部長は「日本と中国の相互理解を目指すかぎり、一方的に調査しただけでは理解はえられない」と書院時代の反省をこめて熱く語ってくれた。

愛知大学では、二〇〇一年中国人学生を日本に招待し、彼らが現代日本をテーマにフィールドワークを実施し「中国人学生が見た現代日本」という視点でシンポジウムを開くことになった。

表面的な友好ではなく、互いに意見を交換し、時には喧嘩もでき

る関係の中から真の友情が生まれ、相互理解が実現するという発想である。学生たちによる相互交流は五月、実現した。

今、時代を越えてひとつの青春の夢が重なりあおうとしている。日中友好に捧げる青春の夢は確かに受け継がれつつある。かつての書院生はあの暗い日中関係の中で翻弄された歴史の証言者として、もつともつと記録されるべきであるだろうし、検証は続けられるべきであろうし、と考えている。中国社会科学院の研究者が東亜同文書院の歴史的検証をはじめたことも画期的なことである。

終わらぬ過去

日本ではあの時代はすでに遠い過去のように語られるがはたしてそうだろうか。私は中国での取材を通して、あの時代が今も中国にとって深い傷を残しており、日中相互交流の妨げになっていること

を感じた。今回の取材交渉もすんなりと受け入れられたわけではない。あの時代に取材内容及べば、中国政府外交部や外国の報道取材の窓口となる中国広電総局への説得に多大のエネルギーを必要とした。はつきりと拒否された時期もあった。

中国に学ぶ日本の学生が必ず洗礼を浴びせられる出来事がある。

それは、親しくなった中国人学生から「南京大虐殺をどう思うか」「日本ではあの時代を歴史の教科書でどのくらい教えているのか」などの質問である。中国の若者たちは歴史を熱心に勉強している。それが国の教育政策と言ってしまうとおしまいが、自分の国の歴史を満足に知らない日本人学生を中国の学生が不思議に思うのわかる気がする。

現在、愛知大学現代中国学部には中国残留孤児の子弟が何人か学んでいる。彼らは、日本と中国の

懸け橋になろうという夢を抱いて入学してきた学生たちである。今は今、彼らを取材しながら番組の続編を目指している。

あの時代はけっして遠い過去のことなどではなく、時代に翻弄された残留孤児たち、そしてその家族たちの存在が今もあることを知るべきだと思う。その意味で中国と日本の事情を身をもって体験してきた彼らから学ぶことも多いはずである。

私は番組作品としてよりも、番組を制作する過程において私自身が出会った多くの関係者とのできごとと大きな意味を見いだしていた。この仕事を通して伝えるべき使命を与えていただいたことに私は感謝を捧げなければならぬ。

(二〇〇一年八月)
(名古屋テレビ制作部専門職部長)